

内村鑑三「代表的日本人」の通読による大衆性低減効果の実証的研究*

An empirical study on effects of reading “Representative men of Japan” by Kanzo Uchimura on reduction of the vulgarity of the mass*

伊地知恭右**・羽鳥剛史***藤井聡****

By Kyosuke IJICHI**・Tsuyoshi HATORI***・Satoshi FUJII****

1. はじめに

明治維新に端を発する日本の近代化の過程において、治山治水事業に始まり、鉄道・道路などの様々な社会基盤整備、即ち土木事業が、我が国に著しい経済成長をもたらしたことは大方の認めるところであろう¹⁾。しかし、社会の急速な変化が恩恵だけをもたらすことは稀であり、それ相応の弊害を内包しているであろうことが少なからず危惧される。事実、土木計画の対象とする領域においても、近代化の進展に伴い、景観問題²⁾や交通問題³⁾等の社会問題が深刻化しつつあることが指摘されている。そして、そうした問題の淵源に、人々の道徳心の頹廃が存在していることもまた懸念されているところである⁴⁾。

このような近代化の問題は、種々の哲学的論考の対象となり続けてきたところであるが、その道徳的頹廃の根源に、「大衆人」なる存在のあることが古くより論じられている⁵⁾。特に、スペインの哲学者オルテガ (1883-1955) はその著書「大衆の反逆」(1930)⁶⁾において、近代大衆社会にみられる価値喪失の中に、人間的生の否定や非道徳が胚胎していることを鋭い洞察を持って指摘している。オルテガの大衆論の特徴は、大衆を数量的な概念あるいは政治的・社会的階級として捉えるのではなく、万人に共通する「心理的事実」として捉えようとしたところにある。この点において、オルテガの論ずる大衆像は時代を超えた1つの普遍的な精神構造を提示したものであり、現代社会において、前述したような土木に関わる様々な問題を検討する上でも含意するところの少なくないものと思われる。この認識の下、先行研究において、オルテガ「大衆の反逆」に基づいた、個人の大衆性を測定する心理尺度が作成されており⁶⁾、大衆性が、「傲慢性

と「自己閉塞性」という二つの因子から構成されることが示されている。ここに、傲慢性とは「ものの道理や背後関係はさておき、とにかく自分自身には様々な能力が携わっており、自分の望み通りに物事が進むであろうと盲信する傾向」を表しており、自己閉塞性とは「自分自身の外部環境からの閉塞性」を表している。即ち、オルテガの論ずる大衆人は、傲慢性なる外向的性質と自己閉塞性なる内向的性質という一見相矛盾するとも言える心的特性を、一個人の内に存立させているという極めて屈折した存在であることが示唆されたものと言える。また、この2つの心理尺度を用いて、個人の大衆性がどのような社会的影響を及ぼすかについて検討が加えられている⁷⁾。その結果、景観問題と公共事業を巡る合意形成問題について、大衆性が否定的な影響を及ぼす傾向が示され、これらの問題の本質的課題の一つが、個人の大衆性という心理的傾向性にあることが指摘されている。このように大衆人なるものが、近代における弊害の一端を担うどころか、その根源に関わっているとすれば、文明の基礎を創り、近代の創出に相当程度寄与してきた土木工学において、大衆性なる個人の非道徳的な心的傾向性を認識し、そうした心的傾向性を抑制する手段を模索するは、当然の責務であるとすら言うことができよう。即ち、「大衆性の低減・抑制」のための取り組みが、土木工学においても求められていると考えられるところである。

以上の認識の下、本研究においてはそうした人々の大衆性を低減・抑制することを目指し、その方途を探るべく、特に、人々とのコミュニケーションを通じた態度変容施策について検討することとしたい。そして、その具体的な手段として「読書」に着目し、良き書物、所謂「良書」を通読することによって、個人ひとり一人の心に潜む大衆性が抑制される可能性を探ることとする²⁾。

*キーワード：大衆性

**正員，社団法人北海道開発技術センター

(北海道札幌市中央区南1条東2丁目11番地，

TEL011-271-3022, FAX011-271-5366)

***正員，工博，東京工業大学大学院理工学研究科

****正員，工博，東京工業大学大学院理工学研究科

(東京都目黒区大岡山2丁目12番地1号，

TEL03-5734-2590, FAX03-5734-2590)

2. 仮説

大衆性抑制のための「良書」とはいかなるものであろうか。第一に、そうした良書の条件を探る上で、オルテガの提起した「貴族」なる概念が重要な示唆を与えるものと思われる。オルテガは、人間の持つ最も根本的な心理的類型として、大衆と貴族という二つのタイプを定義した。即ち、大衆とは「自分に対してなんら特別な要求

を持たず、生きることが自分の既存の姿の瞬間的連続以外のなにものでもなく、したがって自己完成への努力をしない人々」であり、他方、貴族とは「自らに多くを求め、進んで困難と義務を負わんとする人々」を表す⁹⁾。これらの記述は、大衆性抑制をもたらさしめる良書の選定において、「貴族的なもの」に関わるメッセージや物語を含みうるか否かという点が重要な基準となる可能性を示唆しているものと考えられるところである。

第二に、人々において「古典」の通読が道徳心の向上に寄与するであろうことは、しばしば指摘されているところである⁹⁾。これは、歴史的批判に耐えながら、あるべき価値判断の指針を示した「古典」を通読することにより、様々な価値葛藤の中で良識を養う術を学ぶとともに、より高徳なる価値への志向性が高まることが期待されるためである。ここで、大衆性の抑制を道徳心の醸成と換言できるとするならば、古典の通読が人々において大衆性の抑制を促す可能性が少なからず期待されることとなる。

以上の2点から、「貴族的」および「古典（歴史）」という要素を含んだ書物こそ、本研究に最適な書物、「良書」と考えることができる。そこで、本研究では、そうした良書の一つとして、内村鑑三による『代表的日本人』（岩波文庫、1995）を選定することとした。『代表的日本人』は、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人の生涯を叙述し、彼らに宿る日本古来の道徳や倫理の高潔性を説いた啓蒙の書である。本書においては、「貴族的」なる要素は、取り上げられる人物のみならず、しばしば指摘されているところである¹⁰⁾、著者内村鑑三という人物そのものの精神性の崇高さにおいても満足される所であり、「古典（歴史）」なる要素は、その歴史（伝記）的著述の内容をもって担保されるものと考ええる。つまり、本書は本研究が目指すところの「良書」としての条件を十分に満足し得るものと考えられる。以上の理由から、本研究では、内村鑑三『代表的日本人』を選定することが妥当であると判断し、本書を通読することによって、人々の大衆性が抑制される可能性について実証的に検証することとした。そして、この検証にあたり、次のような仮説を措定した。

仮説：内村鑑三『代表的日本人』を通読することによって、人々の大衆性が低減する。

3. 実験概要

(1) 実験参加者

本研究では、以上の仮説の実証的検証をするため、大学生を対象として3回の実験を実施し、最終的な実験参加者110名を得た。そのうち有効回答者は100名であり、男性が79人（79%）、女性が21人（21%）、その平均年齢は20.7歳、年齢標準偏差は2.0歳であった。

(2) 実験手順

実験参加者を大学の構内に集め、おいて、300人の実験参加者を一つの会場に集め、第1回アンケート調査を実施した（以後2回の調査も大学構内の同一の会場にて行った）。第1回アンケート調査の後に、実験参加者を無作為に実験群と制御群の2グループに分類し、実験群に対して内村鑑三著『代表的日本人』、制御群に対して神田敏晶著『You Tube革命』（ソフトバンク新書、2006）の通読を依頼した。なお、本研究では、『代表的日本人』通読による効果をより明確に検証するために、制御群に対して、個人の価値観や人格に出来るだけ影響を及ぼさないような書籍を読んでもらうことを考え、『You Tube革命』を選定することとした³⁾。

上記の書籍通読を依頼した約2週間後・約3ヶ月後に、それぞれ第2回・第3回アンケート調査を実施し、書籍通読の効果を測定した。

(3) 調査項目

本研究では2. で措定した仮説を検証するべく、以下a)に示すような個人の大衆性指標を測るための質問事項を設定するとともに、b)に示すような幼少期の生活環境に関する質問項目を設けた。

a) 大衆性

大衆性指標を測るための質問項目として、先行研究⁵⁾で提案された大衆性尺度を用いて、表-1に示すような2因子（傲慢性、自己閉塞性）19項目の質問を設定し、各項目について「とてもそう思う」から「全く思わない」の7件法で回答を要請した。ここで、傲慢性は、自分自身や社会等の種々の対象に対する自らの制御能力に関す

表-1 大衆性尺度項目

「傲慢性」尺度 (α=.63)	
1	自分を拘束するのは自分だけだと思う
2	自分の意見が誤っている事などない、と思う
3	私は、どんな時でも勝ち続けるのではないかと、と何となく思う
4	自分個人の「好み」が社会に反映されるべきだと思う
5	どんなときも自分を信じて、他人の言葉などに耳を貸すべきではない、と思う
6	「ものの道理」には、あまり興味が無い
7	物事の背景にあることには、あまり興味が無い
8	日本が将来なくなる可能性は、皆無ではないと思う*
9	世の中の問題は、技術ですべて解決できると思う
10	人は人、自分は自分、だと思ふ
11	自分のことを、自分以外のものに委ねることは一切許されないとだと思ふ
12	道徳や倫理などというものから自由に生きていたいと思ふ
「自己閉塞性」尺度 (α=.64)	
13	伝統的な事柄に対して敬意・配慮をもっている*
14	日々の日常生活は感謝すべき対象で満たされている*
15	世の中は驚きに満ちていると感じる*
16	我々には、伝統を受け継ぎ、改良を加え、伝承していく義務があると思ふ*
17	自分自身への要求が多いほうだ*
18	もしも奉仕すべき対象がなくなれば、生きている意味がなくなるのではないかと思ふ*
19	自分は進んで義務や困難を負う方だ*

α：クロンバックの信頼性係数、*逆転項目

る過大な評価に関わる質問項目から構成される。一方、自己閉塞性は、外部世界に対する関心および外部世界との紐帯やその中での責務に関わる質問項目から構成される。なお、本研究では、各尺度の信頼性分析の結果、傲慢性尺度について、「No.17 日本が将来なくなる可能性は、皆無ではないと思う」、自己閉塞性尺度について、「No.10 もしも奉仕すべき対象がなくなれば、生きている意味がなくなるのではないかと思う」の項目を除外することとした。その結果、信頼係数は傲慢性尺度については $\alpha = .63$ 、自己閉塞性については $\alpha = .64$ であった。

b) 幼少期の生活環境

幼少期の家庭環境や地域環境に関する質問項目を設定し、これらを指標化するために、特に7件法で回答を要請した20個の質問項目を対象に因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を行った。その結果を表-2に示す。固有値の減衰、および各因子への負荷量を考慮した後、 α 値を算出し、最終的に第1因子と第2因子に関する尺度を採用することとした。第1因子については、家庭内のコミュニケーションやしつけの程度に関わる項目に対して高い因子負荷が示されていることから、「家庭内コミュニケーション・しつけ」尺度と命名し、第2因子については、近隣地域とのコミュニケーションの程度を表す項目に対して高い因子負荷が示されていることから、「地域内コミュニケーション・地域連帯」尺度と命名した。信頼係数は、前者において $\alpha = .68$ 、後者においては $\alpha = .70$ であった。また、それ以外の質問項目については、本論文では用いないため説明を割愛する。

表 - 2 幼少期に関する質問項目

No.	質問項目	回転バリマックス解		
		I	II	III
「家庭内コミュニケーション・しつけ」				
	家庭内で礼儀作法についてしつけられましたか?	.721	-.060	-.072
	「おはよう」「いただきます」といった家庭内のあいさつをしっかりとっていましたか?	.646	.025	.091
	親にしかられることはよくありましたか?	.606	.031	-.083
	親子間の会話は多かったと思いますか?	.494	.184	.236
	家の手伝いをふだんしていましたか?	.492	.112	-.125
	「節分」「ひな祭り」「端午の節句」などの季節の行事を家庭内でよく行っていましたか?	.458	.234	.434
	社会の問題が家族の間で話題となることはありましたか?	.433	.196	.005
「地域内コミュニケーション・地域連帯」				
	近所の人から、よく注意を受けたりしかられたりしましたか?	-.107	.667	-.145
	近所の子どもと、よく遊びましたか?	-.142	.636	.006
	近所の人にいつもあいさつをしていましたか?	.261	.631	-.069
	近所の祭りや盆踊りにいつも参加していましたか?	-.025	.618	.212
	あなたの家庭は、両隣の家と親交がありましたか?	.114	.600	-.165
	親戚づきあいは多かったですか?	.301	.436	.293
	家によく来客がありましたか?	.292	.379	.166
(個別の尺度として扱う項目)				
	お墓参りによく行きましたか?	.342	.303	.318
	食事のときよくテレビをつけていましたか?	-.183	-.059	.637
	欲しいと思うものは何でも買ってもらえましたか?	-.157	-.171	.533
	テレビゲームでよく遊びましたか?	-.383	.063	.500
	家族での移動はいつも自動車でしたか?	.104	.079	.334
	学校から帰ったとき、家族の誰かが家にいましたか?	.152	-.028	.329
	固有値	3.644	1.899	1.647
	寄与率	18.219	9.496	8.233
	累積寄与率	18.219	27.715	35.948

5 回の反復で回転収束

4. 結果と考察

(1) 書籍通読による大衆性の変化

大衆性、傲慢性、及び自己閉塞性の尺度得点の変化を表-3に示す。この結果を踏まえて、『代表的日本人』の通読が個人の個人の大衆性に及ぼす影響について検証するために、第1回・第2回調査のそれぞれの尺度について、2（事前（第1回尺度得点）vs. 事後（第2回尺度得点））×2（実験群 vs. 制御群）の反復測定分散分析を行ったところ、傲慢性の変化について、両要因の交互作用（事前/事後×実験群/制御群）が有意となり（ $F(1, 109) = 2.81, p = .097$ ）、『代表的日本人』を読んだ実験参加者において、『You Tube 革命』を読んだ実験参加者よりも、一般にその傲慢性が抑制されるという傾向が示された。なお、第3回調査（読後約3ヶ月後）の変化に関する同様の分析では、仮説を支持する結果は得られなかった。この結果は、少なくとも通読直後（約2週間）においては、「内村鑑三『代表的日本人』を通読することによって、人々の傲慢性が低減する」可能性を示しており、本研究の仮説を部分的に支持するものであると解釈できる。

なお、1. で説明したように、オルテガの論ずる大衆性は「傲慢性と自己閉塞性を併せ持つ存在」として描出される。この想定は、両尺度の相関が有意に正であるという実験データ⁶⁾によっても、経験的に裏付けられているところである。その点を踏まえれば、『代表的日本人』を通読した人において、大衆性を構成する傲慢性が抑制されるという本研究の結果は、本書籍の通読が、部分的なものであれ、大衆性の抑制に寄与する方向に働く可能性を示唆するものと理論的に解釈できる。

(2) 幼少期の生活環境が『代表的日本人』の通読効果に及ぼす影響

本研究では『代表的日本人』通読による効果がどのような条件に依存しているかについて検証することを目的とし、制御群・実験群のそれぞれについて、書籍通読後の第2回、第3回調査における大衆性、傲慢性、及び自己閉塞性尺度の変化量を従属変数に、3. (3) b) における幼少期生活環境尺度を説明変数にとった単回帰分析を行った。その結果を表-4に示す。この表に示すように、第3回調査時点における大衆性及び自己閉塞性の変化に関して、「家庭内コミュニケーション・しつけ」の項目

表 - 3 各尺度得点の変化 - 第2回(上段)・第3回(下段)の変化

実験群 (n=71)	第2回				第3回			
	第1回	第2回	変化	変化のt値とp値	第1回	第2回	変化	変化のt値とp値
大衆性	3.07	3.01	-0.05	t=-1.41 p=.162	3.16	3.21	0.04	t=0.68 p=.500
傲慢性	3.02	2.90	-0.12	t=-2.08 p=.041	3.00	3.03	0.03	t=0.45 p=.653
自己閉塞性	3.14	3.22	0.07	t=1.08 p=.283	3.46	3.53	0.06	t=0.52 p=.608

実験群 (n=62)	第2回				第3回			
	第1回	第3回	変化	変化のt値とp値	第1回	第3回	変化	変化のt値とp値
大衆性	3.06	2.99	-0.08	t=-1.51 p=.137	3.17	3.01	-0.15	t=-1.93 p=.061
傲慢性	3.01	2.89	-0.13	t=-1.80 p=.077	2.98	2.82	-0.16	t=-1.78 p=.083
自己閉塞性	3.15	3.17	0.02	t=0.23 p=.822	3.51	3.37	-0.14	t=-1.17 p=.251

表 - 4 単回帰分析・回帰係数の差の検定結果

分析対象	説明変数	従属変数：大衆性の変化				従属変数：傲慢性の変化				従属変数：自己閉塞性の変化			
		B		t 検定		B		t 検定		B		t 検定	
		実験群	制御群	t 値	p	実験群	制御群	t 値	p	実験群	制御群	t 値	p
第1回	しつけ	0.00	0.09	1.09	.28	-0.01	0.08	0.85	.40	0.00	0.11	0.76	.45
第2回	地域連帯	0.00	0.07	0.80	.43	0.03	0.07	0.35	.73	-0.05	0.07	0.80	.43
第1回	しつけ	-0.06	0.13	1.82	.07 *	-0.04	0.08	0.94	.35	-0.08	0.21	2.01	.05 **
第3回	地域連帯	0.06	0.11	0.50	.62	0.07	0.11	0.31	.76	0.03	0.10	0.45	.65

** : 5%水準で有意 (両側) * : 10%水準で有意 (両側)

において、両群の間で統計的に有意な差が見られた。この結果は、家庭内でのコミュニケーションが活発であった人や、挨拶や礼儀などの基本的なしつけをきちんと受けていた人において、『代表的日本人』を通読することによって、大衆性、及びそれを構成する自己閉塞性が抑制される傾向が高いことを示している。つまり、本書通読による大衆性の抑制効果の持続性が、幼少期の生活環境に規定される部分の大きいことが示唆されたものと考えられる。

(3) 「良書」の波及による大衆性抑制の可能性

3. (3) に示した質問項目の他に、実験群と制御群で書籍の波及効果の相違を検証することを目的として、第3回調査において、「読んだ書籍を、周囲の人に薦めたか」という旨の質問項目を設けた。その結果、実験群の27% (17人) の実験参加者が書籍を薦めていたのに対し、制御群では13% (5人) に留まっており、その回答と群とのクロス集計表を作成し、 χ^2 検定を行ったところ、群間で傾向差があるという結果が得られた ($\chi^2=2.79, p=.094$)。この結果は、『代表的日本人』の方が、『YouTube 革命』に比べて、他の人々に波及する可能性が高いことを示唆するものと考えられる。ここで、本研究の仮説が示す通り、『代表的日本人』通読が大衆性の抑制を促進し得るものと考えれば、『代表的日本人』の波及は、大衆性抑制施策の2次的効果を期待させるものと言える。

5. まとめ

先行研究においては、幼少期環境が、自己閉塞性に影響を及ぼす可能性が示唆されていたが⁶⁾、この知見は、既に成人している人々に対する大衆性抑制の方途を考える上では、十分なものではなかったとも考えられるところである。それ故、「良書」の通読が、「成人」の大衆性の抑制に寄与する可能性を示した本研究の意義は少なくないものと考えられる。ただし、本研究は大学生サンプルのみを対象とした実証的検証であり、今後大衆性抑制の方途についてより研究を進めるにあたっては、より多様な属性の成人についての仮説検証が必要である。その中で、人々の自発的行動の喚起を促すような2次的効果の可能性についても考慮を加えつつ、本研究において改めて示された幼少期環境に対する知見を一層深化させ、より効果の期待される施策の検討を行うことが必要であると考えられる。

脚注

- [1] 土木計画にまつわる数多くの論文・書籍の中において、直接に「道徳心の頹廃」を論じているものは筆者の知る限りでは見当たらない。しかし、例えば藤井³⁾が交通問題の漸次的且つ本質的解決にあたり、人々の「公共心」を強く重視していることは、現在の一般の公共心は「向上すべきである」という認識の一つの表出であり、その背景には「頹廃」への危惧のあることが類推される。筆者においては、これを「道徳心の頹廃への懸念」と表現したものである。
- [2] この方策は、個人に残された非自己閉塞的な側面、そして非傲慢的な側面に期待するものである。つまり、ある個人が、仮にわずかでも非自己閉塞的な側面をその精神の内に留めているならば、高潔な人生を描いた物語と、自らの人生を対比する可能性が幾ばくかでも生じるであろうし、わずかなりとも非傲慢的な側面を持ち合わせているのであれば、その対比の内に、自身の方が、その書物に描かれた高潔な人物よりも「倫理的に劣る人生」を歩んでいる可能性について思いが至ることもあり得るだろう。そして、彼がまさにこの点に達した時には、例えば認知的不協和理論¹¹⁾が予測するように、万人が持ち合わせている「正しくありたい」という理想的な自己像への志向性に合致するべく、自身の種々の態度を改めようとする傾向がその精神の中の一つの動きとして生じることが期待されるのである。以上のように、幾ばくかでも非大衆的な要素を持ち合わせている人物ならば、書物に記された高潔な人物の物語を読了することは、その個人の内における自発的な大衆性の低減という帰結をもたらす可能性を有するのである。
- [3] 本書は、YouTube の性能やサイトを中心に生じている諸現象について述べており、YouTube やインターネット、メディアに対する認識についてこそ、読者に影響を与え得るものであるが、本研究で対象とするような、個人の性格や価値観に対しては、大きな影響は及ぼさないものと考えられる。

参考文献

- 1) 鈴木忠義：土木計画学から土木教育への提言，土木学会論文集，No.365/IV-4, pp.1-6, 1985.
- 2) 柴田久・土肥真人：目的別研究系譜からみた景観論の変遷に関する一考察，土木学会論文集，No.674/IV-51, pp.99-111, 2001.
- 3) 藤井聡：TDM と社会的ジレンマ—交通問題解消における公共心の役割—，土木学会論文集，No.667/IV-50, pp.41-58, 2001.
- 4) キルケゴール：死に至る病・現代の批判 (樹田啓三郎 訳)，中央公論新社，2003.
- 5) ホセ・オルテガ・イ・ガセット：大衆の反逆 (1930)，(神吉敬三 訳)，ちくま学芸文庫，1995.
- 6) 羽鳥剛史・小松佳弘・藤井聡：大衆性尺度の構成についての研究—Ortega “大衆の反逆”に基づく大衆の心的構造分析—，心理学研究，印刷中.
- 7) 小松佳弘・羽鳥剛史・藤井聡：景観保全に及ぼす大衆性の破壊的影響に関する実証的研究—オルテガ「大衆の反逆」の景観問題への示唆 (2)，第37回土木計画学研究発表会・講演集，2008.
- 8) 羽鳥剛史・小松佳弘・藤井聡：政府に対する大衆の反逆—公共事業合意形成に及ぼす大衆性の否定的影響についての実証的研究—，土木学会論文集，投稿中.
- 9) 西部邁：国民の道徳，編新しい歴史教科書をつくる会，産経新聞社，2000.
- 10) 隅谷三喜男：内村鑑三と現代—座標軸をもつ思想—，世界，岩波書店，No.422, pp.54-66, 1981.
- 11) Festinger, L. : A theory of cognitive dissonance. Evanston, IL: Row, Peterson. (末永俊郎 (監訳) 認知的不協和の理論，誠信書房，1965)，1957.